＜特集論文＞の論文投稿についてのお知らせ

　日本教師教育学会年報第29号

　特集テーマ　＜教員養成とアカデミズム＞

教員養成において実践的指導力が強調されるようになった背景には、大学における教育学をはじめとするアカデミックな学問領域が、学校現場では役に立たないという批判が強まったことと関連する。今日この見解は、教員養成のカリキュラム全体に大きな影響を及ぼし、ひいては学問やアカデミズムの軽視にまでつながっている。こうした見解が席巻する現状は、教員養成に携わる大学人の多くが自分の専門とする研究にしか関心を持たず、教員養成について他人事のように考えてきたことにも要因があることは否めない。

一方で、教職大学院などでは、開設当時「理論と実践の往還」を標榜したように,従来の体系的学問（「科学知」）とは異なる「臨床知」の形成が目指されていた。「臨床知」の形成は、従来の学問体系に挑戦するとともに、そこに新たな課題を付加する可能性を孕んでいた。教育の実践現場は常に個別的・流動的であるために、抽象的・一般的な方法の一方向的な適用では十分ではないことが指摘されてきたことを考えると、科学知とは異なる臨床知には大きな期待が寄せられるのは当然であろう。では、創設以来10余年を経た現在、この理想はどのように実現したのか、あるいはしなかったのか、しなかったとすれば何が問題だったのか。このような分析・考察が必要であるが、ほとんど看過された状態にある。

また、教職課程コアカリキュラムや教員育成指標などにみられるような、経験や与えられる知識の有用性に終始する教員養成施策の現状は、具体的活動についてのマニュアル化を強化する趨勢をもたらし、さらに教員養成の混迷を深めていくように思える。

大学における学問は教員養成にどのような意義を持つのか？　臨床知の生成はどのようになされているのか、いないのか？

こうした課題について議論を喚起したいと考え、本特集は、「教育学部の30年」「開放制の教員養成を考える」に引き続き、教員養成の内容、特に、教員養成にとってのアカデミズムとは何かに焦点を絞って本特集を編纂することとする。